

2026 年 9 月 16 日(水) ハコラク 10 月号 掲載
ドクターコラム『妊娠中の接種によりお子さんを守る RS ウイルスワクチン』

産婦人科 片岡 宙門 副院長

Doctor
Column

産婦人科

妊娠中の接種によりお子さんを守る RSウイルスワクチン

RSウイルスは世界中に広く分布しており、生後1歳までに50%以上が、2歳までにはほぼ100%が感染します。成人では風邪程度で済むことがほとんどですが、乳幼児、特に生後6カ月未満では重症化しやすく、肺炎、無呼吸、急性脳症などを引き起こすことがあります。その後の気管支喘息との関連も指摘されています。

日本では、年間12〜14万人の2歳未満の乳幼児がRSウイルス感染症と診断され、そのうち約3万人が入院を要しています。特異的な治療薬はなく、入院は生後1〜2カ月で最も多いため、生後早期からの予防が重要です。こうした状況から、RSウイルスワクチンは国による開発優先度の高いワクチンに指定され、承認が待ち望ま

れてきましたが、2024年1月に承認され接種できるようになりました。

妊娠中にワクチンを1回接種すると、母体でRSウイルスに対する抗体が作られ、その抗体が胎盤を通じて胎児に移行します。これにより、赤ちゃんは生まれながらRSウイルスに対する予防効果を得ることができます。

臨床試験では、RSウイルスによる重度の下気道疾患を、生後90日までに81・8%、生後180日までに69・4%減少させました。また、医療機関の受診を必要とする下気道疾患についても、生後90日までに57・1%、生後180日までに51・3%減少させる効果が認められています。一方、生後6カ月以降の有効性は確立していません。

今年4月から、このワクチンは妊娠28週0日から36週6日までの妊婦を対象とした定期接種となり公費で接種できるようになりました。接種後14日以内に出生した場合には赤ちゃんへ移行する抗体が十分でない可能性があるため、余裕をもって接種することが望まれます。主な副反応は、接種部位の痛みや腫れ、頭痛、筋肉痛などです。

日本小児科学会と日本産科婦人科学会も、RSウイルスワクチンへの理解と接種が進むことを期待するとの声明を出しています。生まれてくる赤ちゃんをRSウイルス感染症から守るための新しい予防法として、妊娠中の方はぜひ前向きにご検討ください。



函館中央病院

産婦人科

片岡 宙門 副院長

兼 総合周産期センター長(産科部門)

略歴

平成5年、北海道大学医学部卒業。市立札幌病院NICU、盛岡赤十字病院NICU、北海道大学病院周産母子センター勤務などを経て、平成17年より函館中央病院産婦人科医長。平成20年、同院総合周産期センター長(産科部門)、平成28年、同院診療部長、令和6年、同院副院長に就任。日本産科婦人科学会産婦人科専門医、日本周産期・新生児医学会周産期(母体・胎児)専門医。